高齢者の連合記憶

―記銘時間，再生，再認成績からの検討―

松川順子・牛愛菊
（金沢大学大学院人間社会環境研究科）

【目的】

複数の項目間の連合記憶では，高齢者は若年者に比べてA-Bの結合（binding）が困難なため記憶成績が悪いとする連合欠如仮説（ADH: Assoiciation Deficit Hypothesis, Neveh-Benjamin,2000）が提唱された。欠如要因として符号化時の方略欠如，注意資源や想起時の方略欠如など，さまざまな説明が提供されている。本研究では連合記憶に関する基礎資料を得るため，記銘時間，および再生と再認成績の検討を行う。多くの高齢者による記憶研究では，若年者とは異なるやや多くの記銘時間が条件設定されているがその時間の設定の妥当性は不明である。本研究では自己ペースによる記銘手続きを用い，高齢者がある事柄を記憶できたと考える時間を計測し，その結果としての再生と再認成績を検討することを目的とした。また再認時のディストラクタとして旧項目対の組替対または新項目対を用意し，ディストラクタによる再認への影響を検討した。

【方法】

＜実験参加者＞　金沢市内の65歳以上の健常者27名（男性20名，女性7名，平均年齢68.7歳，平均教育歴12.3年）に研究協力を依頼した。HDS-R（改訂長谷川式簡易知能評価スケール）得点は平均27.3点だった。14名は組替再認テスト，13名は新規再認テストに参加した。

＜実験計画＞　二つの再認テスト課題に対して，てがかり単語頻度（高・低）×手がかり（C）とターゲット（T）の関係性（あり・なし）の2要因計画だった。

＜実験材料＞　手がかりの頻度（高・低）はNTTデータベースを参照し，≦500の単語を低頻度，≧1000の単語を高頻度の単語として抽出した。ターゲット単語はすべて≧1000の高頻度単語だった。関係（C-T 関係）は類義語辞典を参照して，意味的連想と意味的関係を含んだ単語対を作成した。各条件12単語対の計48単語対が学習項目対として作成された。再認テスト用の妨害刺激として，組替対課題では，学習時の単語対を組み替えて作成した。新規対課題では手がかりに対してターゲット項目を新規に用意した。

＜実施手続き＞　実験はSuPerlab4.0を用いてパーソナルコンピュータ上で実施した。実験はすべて個別に行った。実験参加者には研究の概要を説明し実験への同意を得た。参加者は記銘項目対を記憶できたと思ったら次の試行に移った。記銘段階が終了後，手がかり再生テストを行った。想起できない場合には思い出せる程度を1～5段階で評定した。再生後，14名は組替妨害項目による新旧(old/new)再認，残り13名は新規妨害項目による新旧再認テストを受けた。

【結果と考察】

＜学習時間＞　高齢者の記銘に要した時間平均は8.7秒だった。関係あり条件（8.1秒）で関係なし条件より（9.3秒）記銘時間は有意に短かった。実験参加者によって数秒から十数秒までかなりの記銘時間のばらつきがみられた。

＜再生成績＞手がかり再生の成績は低く，正答率は14%だった。また誤答が正答数と同様に見られた。関係あり条件でなし条件より正答が多かった。実験参加者毎の記銘時間と正答率との相関は.33で高いとはいえなかった。記銘時間は記銘そのものよりも参加者の課題への取り組み態度を反映していたと考えられる。また，記銘時間の多さが直接再生成績に反映しているとはいえなかった。

＜再認成績＞新項目対が旧項目対の組替えだった再認テストでは，正答から誤答（フォールスアラーム）を引いた各条件の修正再認率平均は1.9項目（32%）で，関係あり条件で3.3（54.8%），なし条件で0.7項目（12%）と成績に差がみられた。それに対し新項目対がすべて新規の項目だった再認テストでは修正再認率は32.3%で，関係あり条件（37.3%）となし条件（27.3%）で差がみられなかった。全体にフォールスアラームが多く，新旧項目対が明確に区別されているとは認めがたかった。参加者の記銘時間と再認成績との相関は組替再認で.17と低かったが，新規再認で.54とやや高い相関が得られた。組替再認に参加した1名の記銘時間が各項目対20秒を超えていたため，このデータを除いて改めて相関をみたところ.62とやや高い相関になった。記銘時間の内容を更に検討する必要があると考えられる。